

素晴らしい須走を知りたい!

「素晴らしい隊」養成講座 第2回講座概要

第2部：座学 須走の町を知る「須走地区の歴史や文化資源について」

■日時：令和2年10月10日（土）9時～12時

■場所：須走コミュニティセンター

■講師：樽林 一美氏 小山町文化財保護審議会 委員長



■講義概要

1. 須走の年代別特徴

- 伊奈神社：宝永噴火の時の御厨地方の救世主だった伊奈半左衛門を祀った神社。ここにある伊奈半左衛門の銅像の下の説明文に「伊奈半左衛門は宝永噴火の後、飢えに瀕した御厨の人たちに駿府の米蔵を幕府に無断で開いてみんなに米を配ってしまった。」という恩人だと書かれている。これは大正の頃に言われた。実際幕府の代官として富士山の噴火の後、小田原藩がこの地方をほっぽり出してしまおうが、お救い米（飢えに瀕した人たちを救うための米）を飢人に配ったのは確か。宝永噴火で埋まってしまったので種麦を配ったが、駿府の米蔵を開いたという事実はない。新田次郎の「怒る富士」という小説でこのことがテーマに書かれている。それで伊奈神社の説明版にそういうことが書かれるようになった。いまでは全国的にこの話が信じられているが、事実ではない。
- 昔の鎌倉街道と言われている国道138号、須走から籠坂峠に上っていく国道沿いの扇屋旅館の建て替えの時に、出てきたのが古墳時代の土器。あそこは滝ノ沢遺跡という名前になっているが、扇屋さんの玄関に土器が飾ってある。138号沿いにもう少し上に行くと、大尾根遺跡、**おとぐち**遺跡から縄文時代の晩期、弥生時代の初期の土器が道伝いに発掘されている。文献では、古事記に出てくるヤマトタケルの伝説。足柄峠で白い鹿の神が現れてそれを殺したあと、「吾妻（あづま）はや・・・」と叫んで足柄峠から甲州の甲斐の酒折宮へ行ったという事が書かれている。これは当時からの交通のことを考えると、籠坂峠を越えていったと考えるのが一番自然だと思う。やはりこの頃から集落があったのではないかという事が、確かな資料で言う事ができる。須走は、富士登山の登山口で有名だが、富士登山以上に今の須走の集落の発達という事から考えると、御殿場・小山地方は古代からの交通の要衝で、足柄峠と籠坂峠を抱えているので、東から西へ行くにも、海の方から山の方にも行くにもここを通らないとどっちへも行けない場所にある。いい例として、鎌倉時代の富士の巻狩り。富士野藍沢、御殿場辺りで行われ、富士宮の方へ移動するが、それが行われる前に那須野（栃木県の那須塩原）、三原野（今の軽井沢辺り）で行われた後、ここの富士野藍沢へ来る。当時の鎌倉幕府はできたばかりなので、鎌倉への入り口として碓氷峠、これは三原野で地形を覚えさせる交通の要衝。那須野の巻狩りは那須から一つ越えると白河の関、陸奥になる。東北からの敵が入ってきた時の交通の要衝。もう一つは東海道の御厨のあたり。江戸時代になってもこの地方を囲む周りにはすべての道に関所ができる。東海道の本道は「箱根の関所」。御殿場から仙石原に抜ける道にも、乙女峠を越えた所に「仙石原の関所」が作られる。相沢川沿いに下ると「谷ヶの関所」がある。相沢川の左岸を行くと、「川村の関所」。もう一つが須走にあった須走の「十分の一役所」。どこの道

を行っても関所でチェックされるようになっていく。このことから交通の要衝だったという事が分かる。海からの道だと、相模から来る道も、沼津から来る道もみんな須走へ集まってくる。戦国時代、葛山氏元という葛山氏の国人領主が治めていた時代は上杉謙信が武田信玄に塩を送ったという「敵に塩を送る」ということわざの舞台になった塩を止めた所が須走、竹之下、神山、汲沢。ここで海から入ってくる塩を止める。竹之下は鈴木さんという馬を使って運送の仕事をしていた人。神山も同じような仕事をしていた武藤さん、汲沢は芹沢さん。今いる方のご先祖さんたち。そういうような場所。そういうところを通して来た荷物が全部ここに集まり、籠坂峠を越えていく大事な場所。戦国時代、武田信玄は御厨が欲しくて仕方なくて、何回かここへ入ってくる。その中に深沢城を攻撃した時代があるが、深沢村の村鑑にそのことが書いてあり、深沢城は武田信玄が2回攻めてきた、と書いてあるが、本当の資料を読むと3回来ている。最初に来た時に籠坂峠を越えてくるが、「滝ノ沢を越え、阿多野原まで出てきた」と書いた資料がある。滝ノ沢は浅間神社のすぐそばの地名で、今でもたき道という道標があり、精進川が流れていて、昔はその滝で禊をして富士山へ登ったと言われているが、その「滝ノ沢を越えて」と文書の中で見つけた時は古い地名だということと、富士山の登山もそのぐらい古いという事が分かった。河口湖に妙法寺というお寺がある。沼津の光長寺の末寺。妙法寺で、和尚さんが毎年つけていた「妙法寺記」に須走のことが書かれたのがいくつかある。西暦1500年位、関東で戦乱があったために、本当は河口湖や富士吉田へ来るはずの道者たちが皆須走へ回ってしまったという記録がある。その頃から登山道があったという事は確認されている。その前に、須走の掛け仏(室の中に青銅製の仏様をどこの室でも掛けてあった)の一つに、「至徳〇〇年」という南北朝時代の銘が入った掛け仏が見つかった。持ち主が東京の富士講の麻布の方に渡したが、その方が小山町に寄付してくれた。現在小山町の教育委員会で保存している。掛け仏も明治になり、室の土の下から出てきたと言われているが、廃仏毀釈の時に土の下に埋めていたのではないかと、かなりの確率で言えると思っ

ている。

—富士山の登山のことは、山頂の小屋は全部須走の人のもの。もう一つ須走に大きな利点をもたらしたのは、山頂の火口(江戸時代までは内院と言っていた)、内院にお賽銭をあげるが、あげたお賽銭を大宮と須走でどっちがどれだけ取るかという争いが元禄時代位に起こっている。その定義を巡っての争いで、大宮が六部、須走が四部ということが裁判で決まる。おおざっぱに言うと、小判、貫銭(銭差に差し通した一貫文の銭)は大山、小銭は須走。それでもかなりのお金が須走のものになったようだ。大宮との裁判の中で、その他にも遭難した人、山で亡くなった人をどこの場所で亡くなったら誰が下ろすのかまで決めている。今でも山岳会で富士山に避難小屋を持っている。今は県警の遭難救助隊ができていて、捜索や遺体の収容など遭難救助を全部やってくれるが、前は山岳会が積雪期には出た。その時、遺体がどこにあるか、静岡県側か山梨県側かで、出るか出ないかで行政の間でやり、静岡県側なら私たちが出なければならなかった。県境はまだ決まっていなかったので、余計厄介な話になる。そのくらい富士山の利権というのが須走にとっては大事だった。

2. 須走を歩くルート

—今日は、伊奈神社を回って、十分の一役所、須走の街並みと御師を説明し、たき道の道標に行く予定だった。滝不動の石像仏を見て、永昌寺跡、西寿院跡を見てもらいたかった。お墓に残っているお地蔵さんや石仏の格好をした石造物のほとんどが壊されて首がなくなって残っている。それは、須走は明治の初めの廃仏毀釈が一番盛んだった場所だから。廃仏毀釈で全部仏さんを排して、仏教の信仰をなくすという意味もあり、神社が国家神道になる前、須走の御師たちを含めてほとんど全

- 員が神道になる。こういう例が御厨には多く、その先導をしたのが、須走の御師たち。富士宮の富士本宮浅間大社の富士氏という人が音頭を取って、浅間神社のある麓の集落はほとんど全員神道にさせる。富士吉田も須山も大宮も周辺はそういうことになっている。これは、裾野で世界遺産になる前にやった「富士登山道サミット」で富士宮の渡先生や富士宮の堀内先生に聞いた話で、御厨ではもう一人先導者がいて、御殿場の杉名沢の天然寺というお寺があったが、その住職の本田松山が突然住職をやめて神道、神主さんになる。御殿場の永原大神宮を建て、そこの神主になり、名前を本田瑞穂に変える。杉名沢から原里は神道が多い。日本でも神道の密度が高い所だと思っている。
- 今、浅間神社の横に東富士病院があるが、そこに千体阿弥陀堂というお堂があった。持ち主は小野大和、現在の元神主の小野さんのところ。管理は杉名沢の天然寺の弟子だと資料では書かれている。そこにあった千体仏、木喰但唱という江戸時代初期の木喰僧(十穀を食べないで修行する僧)はこの辺りの御厨のお寺をいくつかを建てたりしたが、その但唱の彫った千体仏が今では御殿場の大雲院に飾られている。これも廃仏毀釈の時に香積寺に移され、さらに本寺だった大雲院に移る。いまだに千体仏堂が浅間さんの横にあったら、世界遺産の構成資産になっていたと思う。
- 江戸時代の掛け仏が明治の30年くらいになると山小屋の土の中から掘り出されて公になるものがこの辺にたくさんある。廃仏毀釈の時に埋めたものを、ほとぼりが冷めたら掘り出して自分の家に飾ったのではないか。明治の中頃になると土間から出てきたとよく言われる。大雲院や宝持院など富士山関係の仏教関係の遺物は須走からいったものが多い。中畑の善龍寺の御殿場市の文化財になっている喚鐘(かんしょう)も富士山から下ろしてきたものだと言われている。宝持院の大日如来の銅の彫刻も西寿院から行ったものだと何かで読んだ記憶がある。そのようにお寺のものが須走の場合は全部本寺に引き取られている。須走は廃仏毀釈の時にお寺が全部なくなるので、4つのお寺全部からそこの本寺にいき、保存のいい所は残っている。

3. 須走の御師たち

- 須走の御師について、苗字は米山さん、高村さん、外川さんなど。ほとんど甲州の人たちの苗字と同じ。御厨にはあまりない苗字。須走の御師がいつごろから来たのか考えたが、甲州の人たちがここへ出てこられるのが戦国時代だと武田信玄が深沢城を取った時。あの時にすぐ信玄は須走の浅間神社と沼津の岡宮浅間神社に甲州の勝山の富士御室浅間神社の小佐野越後守という神主を送り込む。中世の御師は檀那場を廻って歩くので、諜報活動をやらされていた。富士吉田の北口本宮富士浅間神社に調査に行ったとき、武田透破侍(すっぱざむらい)、小山田透破侍と富士吉田の御師たちの名前の書かれた名簿のような帳面があった。それを見ると、富士吉田の御師たちはそういう透破侍だった。おそらく武田信玄は深沢城を取った後、すぐ自分の部下たちを御厨のあちこちに領地を与えて住みこませるが、それと一緒に甲州の神社関係の人、登山に関係した人たちを須走に送り込んだのではないかと考える。
- 須走にその人たちが入る前、深沢城が落ちる前の須走の人たちの姓については、大永6年(1526年)の「妙法寺記」の中に、「籠坂の麓、梨の木平で合戦あり」と書かれている。梨の木平は富士高原のゴルフ場の地名で今でも残っている。そこで大規模な合戦が行われた記事があるが、須走殿、葛山、御宿、高田の名前がある。須走に現在でも住まわれている高田さんがいらっしゃるので、かなりの確率で高田さんはその子孫。その前、中世に須走あった「須走役所」という通行料を取った関所、登山者から入山料を取った役所「須走道者関」があったことが確認されていて、その管理者が芹沢伊賀守言っているので、御殿場の汲沢に芹澤玄蕃(せりざわげんば)、芹澤将監がいるがその一族だと思う。文書もその文書を持っているお宅と同じ。芹沢さんが須走にいたのではないかと察

しがつく。そういう人たちはほとんどがいなくなり、御師を中心に新たに信玄が送り込んだ人たちが富士山の利権を新たに獲得するようになったのではないかと考えている。

一ずっと歩いてくると良く分かるが、石造物もみんな明治からのもの。小野さんのお宅の前にある小さな浅間大神の石碑など、新しいものばかりで、江戸時代のものが残っていないのは廃仏毀釈のせいもあるが、火事が多くて何回も火事にあっているので、今の町並みも江戸時代の町並みとはかなり違ったものになったのではないかと思う。